A Study of Joseph Conrad

"Under Western Eyes"

Toshihiko Ueki

I

この小説 *Under Western Eyes* が出版されたのは1907年であり，ロシア革命が起こったのは1917年である．従ってこの小説の背景となっている時代は，所謂革命前夜ともいえる19世紀末である．そこで当時のロシアの社会的情況を考察してみよう．

当時，ロシア社会はアレクサンドル二世のもとで中央集権，絶対専制君主制度をひき，確固たる封建制度が存在していた．文化面においても自由主義制度を確立し，機械文明を発展させている西欧世界から取り残されたような状態であり，著しく遅れていたことは否定出来ない．又，民衆（特に農民）も政治の貧困に喘ぎながらも，政治意識は非常に低いものであった．これは単に民衆のみの責任ではなく，教育制度の不備も大なる比重を占めていたことであろう，しかし貴族や大富家の子弟の中には，西欧やスイスに留学することにより，西欧の政治思想や，政治形態を学び，批判精神を身につけたものも少くなかった．こうした進歩的な学生が中心となってロシアのあらゆる面における遅滞性を認識し，所謂ナロードニキ（農民社会主義）ともいわれる空想社会主義運動をロシアに展開するにいたったのである．彼等はロシアは西欧のような資本主義体制を経過しないで，村落共同体の基礎の上に社会主義制度を築きうると考え，農民がその革命の中心であると信じ，農民を教育することに全力を注いだのである．小説 *Under Western Eyes* に登場する Victor Haldin, Peter Ivanovitch 等もこの思想の信奉者なのである．

この空想社会主義に対抗する運動としてマルクス主義（社会民主主義）運動がナロードニキ運動に少し遅れて展開されるようになった．こうした民衆による運動を阻止するために，官憲当局は弾圧を次第に強め，スパイが放たれ，混乱した非常に危険な社会情勢を作り出していたのである．

ペテルスブルグ大学の哲学科の学生である Razmov はこのような不安定な社会情況をある程度認識していたが，そうした社会に直接的な関心を持たぬ彼は将来に託した夢の実現のために只ら勉学に励んでいたのである．

> Razumov was one of those men who, living in a period of mental and political unrest, keep an instinctive hold on normal, practical, everyday life. He was aware of the emotional tension of his time; he even responded to it in an indefinite way. But his main concern was with his work, his studies, and with his own future. 1

この Razmov の部屋に Anarchist である Victor Haldin が "Minister De P-" を殺害し，避難場所を求めて侵入して来た時，Razmov は夢想だにしなかった事態に直面したのである．自ら

Intellectual であると自負し，西欧文化に感化され，西欧の政治的自由と個人的自由を自己のものとしていた Razmov はこのような重大な事態に遭遇した場合『如何に行動すべきか？』という精神的準備あるいは意志決定を今迄に一度として考えたことはなかったのである．しかも今 Razmov の置かれた状態は彼の将来を否，彼の生命の安否をも左右する精神的極限状態なのである．すなわち Haldin の侵入は彼の未来の可能性を脅かす悪であり，生まれて初めて彼が人間としてその真価を try されようとしているのである．Haldin 嘆願を聞き入れ，馭者 Ziemianitch を探しに出かけるのであるが，それは Ziemianitch を探し出し，一刻でも早く Haldin を部屋から追い出すことが Razmov にとって将来の夢を危険から守る最も手取り早い方法なのである．しかし彼のこの重大な危機の唯一の救済者たる Ziemianitch は夢想家 Haldin の語る A bright spirit! A hardy soul! The best driver in St. Petersburg. He has a team of three horses there. …… Ah! He's a fellow! といった姿とは余りもかけ離れた酒に酔い，その約束すら果せない Ziemianitch の姿であった．"you lie" と叫けび Ziemianitch を激しく乱打する Razmov の姿は彼の心の悲しみの表現であり，精神的救済者を失い，この広大なロシアに頼る者もなく，唯一人残された Razmov の孤独の姿である．この時彼に信頼を寄せている人間を裏切るべきか？否か？の問題が Razmov の前に提起されるのであり，Haldin は Razmov という人間の精神的限界の尺度となるのである．Razmov は Haldin を官憲に渡すのであるが，彼の裏切行為に至る半意識的な過程は実に驚くべき微妙さと，理法，そして象徴用法を用いてなされているのである．Razmov is "as lonely in the world as a man swimming in the deep sea" "The word Razmov was the mere label of a solitary individuality" "Being nobody's child he feels rather more keenly than another would that he is Russia — or he is nothing. He is perfectly right in looking on all Russia as his heritage" その結果 Razmov はロシアそのものと結び付くことになる．ここに Razmov は individualist でありながら Russia という決して切り離すことの出来ぬ大地と堅く結びつき，Razmov の将来の取るべき道，彼とロシアとの一体性を暗示しているのである．これまでの社会から遊離した自己本位な individualist としての Razmov から community との unity を意識する過程は次第に雪に覆われていく広大なロシアに対する反応の中に如実に現われている．

> He responded to it with the readiness of a Russian who is born to an inheritance of space and numbers. Under the sumptuous immensity of the sky, the snow covered the endless forests, the frozen rivers, the plains of an immense country, obliterating the landmarks, the accidents of the ground, levelling everything under its uniform whiteness, like a monstrous blank page awaiting the record of an inconceivable history. 2

雪は彼の過去を全く覆いつくし，新しい彼の人生の始まりを象徴するものであり，彼の将来は a monstrous blank page awaiting the record of an inconceiable history なのである．

彼が社会を意識する時，たとえその社会が Autocratic な社会であろうともその社会なくしては彼の存在の基盤が失われる以上，その社会を破壊しようとする Haldin は当然門外漢であり，

社会の為に征伐されなくてはならない．彼は社会を守る為に選ばれた人間なのである．しかし彼が社会を肯定し，それと自己とを結び付ける時，彼は以前の自己本位の自由主義を否定したのである．

> Better that thousands should suffer than that a people should become a disintegrated mass, helpless like dust in the wind. Obscurantism is better than the light of incendiary torches. 3
>
> He was persuaded that he was sacrificing his personal longings of liberalism rejecting the attractive error for the stern Russian truth. 4

彼の自由主義の否定は，自己の未来の可能性を否定し，社会の一員としてその任務を果たすといった簡単なものではなく，自己の信念を，友人の信頼を，そして社会の倫理を裏切るか？ 否か？という問題，自己忠誠という個人的倫理と公共の倫理との間の相剋を問題とするようになるのである．Rasmov が社会との連体感と意識し，Haldin の phantom の胸の上を歩いて行くことは Haldin の放棄の象徴であり，この Razmov の思考について Conrad は次のように語っている．

> In Russia, the land of spectral ideas and disembodied aspirations, many brave minds have turned away at last from the vain and endless conflict to the one great historical fact of the land. They turned to autocracy for the peace of their patriotic conscience as a weary unbeliever, touched by grace, turns to the faith of his fathers for the blessing of spiritual rest. Like other Russians before him, Razumov, in conflict with himself, felt the touch of grace upon his forehead. 5

だが Razumov は元来 individualist なのである．従って彼の体制への協力は一時的なものであるが，ここに Super-Ego を中心とした個人主義的な自我と，社会の中にあって，社会に協力しようとする社会的自我との拮抗が生じ，Razumov の苦悩が深まっていくのであるが，もう一度彼が置かれた状態を再考してみる時，危機の状態に際して Razumov は理性的に物事を熟慮しているようでありながら，彼の心奥では理性だけでなく，自己保存の本能が激しく渦巻き，完璧とも思える彼の理性の鉄壁の中から，論理的な筋道が一瞬止絶えた合間を縫って間泉の如く，突如として吹き上がる本能の泉は理性の流れを乱し，Razumov を半意識の内に本能的欲求を満足させる為に，本来の individualist でない方向に Razumov を押し流して行くのである．我々は人間の理性が適格に働らくには一定の条件が必要であることは知っている．日常生活において，想像しうる事態，又過去において経験したこと，自分の生命，あるいは生命ともいうべき未来の夢に危険が及ばない範囲にあって，理性は初めてその働きをなすことが出来る．しかし日常生活と余りにもかけ離れた予測だにしなかった重大な事態に直面する時，それは既に理性の活動範囲を起えているのである．従って Haldin の話しを聞いた時，Razumov が本来の自己でない自己を演じたこと，すなわち自発的な意志決定ではない強要された行為，束縛された行為に屈して何事かをなすことは個人の自由の放棄であり，自己否定の行為なのである．しかしその行為の結果は当然個人の責任となる．ここに自らが確信することなく，自発的に行なわなかった行為に対し

て，如何に論理的にその正当性を釈明しようとも，自己の良心を休めることの出来る説明は出来ないのである．結局 Haldin の信頼を裏切った時，Razumov は自らの真の自我を裏切っていたのである．

Razumov の悲劇は単に彼が陥ち入った事態を前もって予測出来ず，何らかの意志決定をなさず自我に非ざる自我を演じたという事実のみにとどまるのではなく，Haldin は "Minister De P-" の殺害を計画した時，彼は母と妹を国外に出し，下宿の女主人に危険が及ぶのを恐れ，下宿を引き払い，最善の注意を払っておきながら Razumov に親，兄弟が無いことを理由に，又勝手に Razumov を理性的な信用の出来る同志と想像し，その作り上げた Razumov の illusiom を真実と信じ込むといった実に利己主義的な誤った個人的判断に基づく誤認が Razumov を悲劇の中に陥し入れているのである．それは Razumov にとっては何ら宿命的な関係ではないのである．何故なら肉親との関係は生まれながらに定められたものであり，一個人の力によって変革されるべきものではない．それ故，個人は肉親との相互関係において如何なる関係に置かれようとも，それは当然宿命として堪えねばならない関係であるが，Haldin のような Razumov とは宿命的な繋がりを持っていない者は，Razumov を自己の目的のために悲劇に巻き込む権利を所有していないのである．又そうした大事な事柄を決定する際に Razumov が天涯孤独の身であり，心の支えとなる信頼出来る相談相手を持っていなかっこと，そしてロシアという東洋世界の不条理な社会の中で Haldin という人間に出合ったことが Razumov の悲劇なのである．

Razumov は人生は孤独であり，個人の純粋なる意志の力による自我の努力次第で如何ようにでもなると考えていたが，Haldin を官憲に渡した時，この彼の人生観は大きく動揺させられるのである．すなわち，個人を中心とした人生観は Haldin の逮捕後三週間目に "And now to work" と独語する Razumov にとって Mikulin のことが意識から去らず，彼の勉学を妨げる，もはや Razumov は心の平静さを取り戻すことは出来ず，又他人との関連を意識せずにはおれず，本来の孤独な自己に戻ることも出来ない．彼は常に社会を意識しなくては，あるいは他人との繋がりを意識しなくては存在しえない人間，所謂社会的人間になっているのである．従って彼は彼が属することの出来る community を探し求めなくてはならない．その community として彼に許されるものは彼の属する階級そのものへの帰属であるが，Haldin を死に追いやったことはその階級への裏切行為である故に大衆の階級に帰属することは彼の良心が許さないのである．そして個人的な関係を結ぼうとする彼の前に現われたのは Victor Haldin の妹 Nathalia Haldin であるが，Nathalia もまた彼には真実を打ち明けることの出来ない人間なのである．すなわち彼には "object of loyalty" がないのである．

次に自己に対する loyalty は彼が Haldin を官憲に渡す時

> Betray. A great word. what is betrayal ? They talk of a man betraying his country, his friends, his sweetheart. There must be a moral bond first. All a man can betray is his conscience. 6

と自分に言い聞かせたにもかかわらず，その自己の行為がはっきりと評価出来ない点に曖昧なも

のとなっていくのである．Razumov の Haldin への裏切りは彼の望んでいた個人的自由を与えなかったばかりか彼の "object of loyalty" を奪ったのである．従って Mikulin の語る "you shall end by coming back to us" がここにその真実味を帯びて来るのである．しかし Razumov のその後の人生はいわゆるこの "object of loyalty" の探索であるであると解釈される．結局 Razumov は Mikulin の懐柔に屈して警察のスパイとなるが，この事実は単に Razumov が Mikulin こそ彼の心の苦悩を理解しうる人間と考えたこと，又人間は何らかの community なく精神的孤独の中に生きていくことは出来ないということのみならず個人が，—— Conrad が小説の中で登場人物などに語らせているロシア的情況：

> the spirit of Russia is the spirit of cynicism: There is neither peace nor rest in Russia for one bnt in the grave. That propensity of lifting erery problem from the plane of the understandable by means of some sort of mystic expression, is very Russian: I suppose one must be a Russian to understand Russian simplicity. a terrible corroding simplicity in which mystic phrases clothe a naïve and hopeless cynicism: I think sometimes that the psychological secret of the profound difference of that people consists in this, that they detest life, the irremediable life of the earth as it is, whereas we westerners cherish it with perhaps an equal exaggeration of its sentimental value. But this is a digression indeed: Ererything is inconceivable: your Russia is a cruel country: I think you people are under curse:

といった西洋の論理的な合理主義の立場からすれば考えられないような不可解な思考，行動が支配する Russia といいう呪詛に取りつかれたような世界であるが故に — 政治という不気味に変転する渦の中に巻き込まれ，破滅へと導かれていくことを示しているのである．

Razumov は精神的 community を持たない孤独な人間であると同時に，Haldin への裏切りによって生命の危険が絶えず付きまとっているのである．従って彼は Haldin への裏切りの後，自らを本来の自己でない悪人らしき人間に変質することによってその安全を守もろうとするのであるが，Ziemianitch の死によって彼の生命の危険が一応取り除かれた後，Razumov が自ら危険の中に身を晒すことにしたのは，Haldin を裏切った事実が彼にその釈明を求めたに外ならないのである．彼は生来の悪人ではない故に学友から騙し取った金銭を車窓より投げ捨てたように，Nathalia Haldin の魂を盗もう (I shall steal his sister's soul from her) としても，彼の理知的な感受性は Sophia Antonovna や Nathalia のように真の自我を持ち，自己を超起したより大きな目的に向って生きているといった非常に強い即象を与える人間に接する時，穴蔵の中で怯え，真の自我を消失して，真に生きているという意識を持っていない，窒息しそうな実体のない幽霊のような自分の存在に我慢が出来なかったのである．従って Razumov が Geneva に来たのは革命運動をスパイするためではなく，彼は気付いていないが自己回復の手段，すなわち object of loyalty を見出すために外ならないのである．我々は "A mere blind tool I can never consent to be" と Razumov が語る時より，彼の世界に，ロシアの社会に嵐の前兆を見，Nathalia が語る "So foul a sky clears not without a storm" が生づるのを予測するのである．Razumov の精神

世界はその中心を失った道徳不毛の世界であり，その意識が，Victor Haldin の母の姿に Victor Haldin を，彼を信頼し，好意を寄せる Victor Haldin に似た Nathalia を見る時，増々強烈なものへと生長していくのである．彼がこの意識に耐えられなくなり告白に出かけた後，下宿の主人の "He was going out because he needed air" という一節は Razumor の精神状態を見事に浮彫りにした象徴的な一節である．我々はここに Razumov の人間性回復を期待出来るのであるが，彼がその真実を最初に告白したのは Nathalia ではなく，revolutionaries であったのは，彼が "Not one to go to. Do you conceive the desolation of the thought-no one-to-go-to?" と語っているように人間との真の精神的交流を強く憧がれていたからなのである．しかも *Nathalia が Razumov の告白を聞いて流す涙は兄，Victor Haldin，のための涙であり，Razumov は，彼女にとって兄を裏切った，裏切り者としての彼の姿でしかないのである．そこにあるのは Razumov と Nathalia Haldin との個人的な関係でしかあり得ないのである．一方 revolutionaries に告白することは彼等の報復が如何なるものであれ，それは一つの group からの罰を受けることであり，group を裏切ったことになるのである．換言すれば，Razumov は一つの集団と関係を持つことを意味するのである．ここに我々は，Conrad が彼の他の作品でも語っている個人の社会への復帰，個人と社会との連体感という問題を再度ここに見るのである．だが Conrad は *Lord Jim* や *Nostromo* においてと同様，Razumov が個人と社会との連体感に目覚め，社会へ復帰する段階において，彼を "deafness" という肉体的不具者にすることによって，外部世界との交流を遮断し，二度と社会と交われぬ孤独な状態で復帰させていることは Conrad の Pessimism のなす業であろう．

II

> I saw these two, escaped out of four score of millions of human beings ground between the upper and nether millstone, walking under these trees, their young heads close together. Yes, an excellent place to stroll and talk in. It even occurred to me, while we turned once more away from the wide iron gates, that when tired they would have plenty of accommodation to rest themselves. There was a quantity of tables and chairs displayed between the restaurant chalet and the bandstand, a whole raft of painted deals spread out under the trees. In the very middle of it I observed a solitary Swiss couple, whose fate was made secure from the cradle to the grave by the perfected mechanism of democratic institutions in a republic that could almost be held in the palm of one's hand. The man, colourlessly uncouth, was drinking beer out of a glittering glass; the woman, rustic and placid, leaning back in the rough chair, gazed idly around. 7

ここに我々は自由主義国家と社会主義国家との対比を明確にみるのである．すなわち，スイスのような小さな西欧文化の影響を受けた文化水準の高い国家においてのみ自由主義制度が取れるのであって，文化水準の低い巨大なロシアのような国にあっては統一性という問題で，それは実現不可能とも思えて来るのである．しかし自由主義国家は個人の人格を尊ぶ余り，社会全体の連

体感を欠くものであるが，ロシアのような国にあっては（しかも独裁政権のもとでは）個人は人格をもつ一人の人間と見做されるのではない．従って個人は独立して存在するものではなく，連体あるいは集合して存在する以外には存在することは不可能となる．ここに community が芽生えるのである．この cnmmunity は個人が属する集団が如何なるものであれ，それなくしては個人の存在の位置付けをする基礎を消失する故に，その絆は個人の人格を尊ぶ自由主義的な集団に対する個人の絆とは比較にならない程強いものとなる．従って Razumov の存在は Russia というまさに崩壊しようとする独裁専制国家を無視して存在することはないのである．Razumov がいかに理性的であれ，個人主義者であれ，他のことに無関心であろうとも（無関心であろうと装おうとも），ロシア人がロシアと結びついている宿命的な絆は断ち切ることは出来ないのである．それは理論ではなく，長年に渡って培われてきた無力な個人にその存在価値を付与する絆—感情的愛国心—なのである．しかしここでいう Razumov の愛国心とは単に現体制を維持しようとする盲目的な感情ではなく，個人の存在を肯定させうる個人と一体となるロシアそのものに対する感情なのである．だから Razumov はロシアの大地と直接結び付いているのであって，革命家達や独裁政権の官僚と結び付いているのではない．彼はあくまで個人的自由主義者なのである．このような Razumov の個人的な立場は彼のメモした信条を見れば明らかである．

History not Theory.
Patriotism not Internationalism.
Evolution not Revolution.
Direction not Destruction.
Unity not Disruption. 8

"Evolution not Revolution." "Direction not Distruction" は明らかに目的が手段を聖化する陰謀主義である革命暴力の否定であるが，決して改革を否定するものではない．'History not Theory." "Patriotism not Internationalism." "Unity not Disruption" は個人主義者の自由主義的なものの考え方である．すなわち Razumov はロシアの歴史の中に存続して来た大衆にとって不都合なものを除去し，改革すべきものを改革し国を愛する人々の心の統一を願っているのである．これはとりもなおさず，Conrad 自身の考え方である．Conrad は保守主義者ではあるが，決して改むるを憚る人間ではないことは Nathalia に語らしている次の文章から明らかである．
"I would take liberty from any hand as a hungry man would snatch 〔at〕 a piece of bread."
又 "Autocracy and War" の中で彼は——専制政治は野蛮であり，人間の進歩の流れに反するものである．そのような墓場から改革を望むことは出来ぬ．従って革命は必然的なものとなる．しかしロシアの革命は大衆の未熟な政治意識のために新しい独裁政治を生むことになろう．革命は進歩のための近道ではあるが，進歩とは国民の総意を誠実に実現しうる国家を創造することにある——と述べている．我々がこの Conrad の考え方を熟知しているなら，我々は *Under Western Eyes* における空想社会主義者の革命理論に対する Conrad の反対感情を明確に理解出来るのである．

空想社会主義者はあたかも彼等の力と大衆の力でもって革命の実現が可能の如く考えている

が，その革命の指導者たる Peter Ivanovitch は口先の革命理論を唱えるだけで，彼の主なる目的は金持ちの未亡人に取り入り，その遺産を譲り受けることである．又彼は女性崇拝者でありながら，女秘書を酷使しするといった，言動不一致な人間なのである．にもかかわらず革命家達は彼の真の姿を見抜けず，彼を革命の指導者として崇拝している姿は空想社会主義者の愚かさであり，人間や物ごとに対して冷静な批判力をもたない彼等に対する Conrad の冷笑的な批判である．このような盲目的，fanatic な革命家に対する批判は Conrad をして次のように語らしめている．

> The last thing I want to tell you is this: in a real revolution—not a simple dynastic change or a mere reform of institutions—in a real revolution the best characters do not come to the front. A violent revolution falls into the hands of narrowminded fanatics and of tyrannical hypocrites at first. Afterwards comes the turn of all the pretentious intellectual failures of the time. Such are the chiefs and the leaders. You will notice that I have left out the mere rogues. The scrupulous and the just, the noble, humane, and devoted natures; the unselfish and the intelligent may begin a movement—but it passes away from them. They are not the leaders of a revolution. They are its victims: the victims of disgust, of disenchantment—often of remorse. Hopes grotesquely betrayed, ideals caricatured—that is the definiton of revolutionary success. 10

Conrad は独裁主義者も偏執的な心の狭量な人間であるが，革命家も又同類であると批判しているのである．こうした過激な革命家に対する Conrad の嫌悪感は革命の皆ともいうべき Château Borel に象徴されているのである．Château Borel は新しい力を生み出す生命力を宿している場所ではなく，荒廃した薄気味の悪い，没落した bourgeois の退廃的な雰囲気に包まれた古い朽ちかけた建物であり，そこに出入りする Peter Ivanovitch の黒眼鏡に肥満した体は革命家の行動的な姿ではない．又実行力がなく理論のみに酔い，金がありながら非常に倹約的な Château Borel の所有者 Madame de S-. の顔の表情や，食事の様子，衣服には一種の不気味さと，おかしさが漂よっているのである．しかし，専制的な暗い社会の中で生きている癒しがたい不幸にうめく人間の数がふえればふえる程，理想的な社会を口にする人間は純粋な理想に燃える学生達にはますます崇高な姿に見えるのは理の当然である．そういう意味で暗い社会の中に Peter Ivanovitch を出現させたものは Conrad のすぐれた手腕として高く評価していいだろう．

冷静な Conrad にとってはその理論が余りにも幼稚な空想にすぎない欠陥人間とも云える彼等，空想社会主義者，を心の底から憎悪しているのであり，空想社会主義者なる夢想家は永遠にこの世に悪を及ぼすのである．彼等，空想社会主義者，は冷静，確実な批判精神を欠く大衆を扇動し，現実を嫌悪させ，人間発達の世俗的理論を軽蔑させ，社会を混乱に陥し入れるが，口先ばかりの役等は真に革命を起こすべき力も，意志もなく，大衆に与えるべき何物をも持たぬ，実につまらぬ烏合の衆なのである．しかし Conrad はこうした空想社会主義者に対しての軽蔑とは逆に，Sophia Antonovna のように革命がこの人間世界の何ものをも変えることは出来ないが，だからといって現実の社会的予盾と妥協することなく，ひたすら理想を求めて永遠に闘う決意を秘

めた彼女に対して，欺満的な革命家には決して見せなかった好意的な態度を示しているのである．又 Peter Ivanovitch の秘書，Tekla の何ものかに対して自己を犠牲にして尽くそうとする態度にも好感を寄せているのである．これはとりもなおさず，人間の愛情を信頼し，希望を，夢を追い求める人間として Conrad が *Rord Jim,* や *Nostromo* の主人公，Jim, Nostromo に示した態度と共通するものである．すなわち，人生を自己の確信に基づいて真摯に (burn) 生きるか？ 何もせず下劣に (rot) 生きるか？ の問題であり，真摯に生きる人間，自分の行動に自信を持っている人間に Conrad は好意を示しているのである．

この二人と性質を少し異にしているが，Victor Haldin の妹 Nathalia Haldin は Conrad が描いた女性の中では，最も崇高な女性であり，又我々に彼女が呼吸しているという強い Impression と共に，Russia の将来の明かるさを感じさせるめずらしい女性である．彼女の Russia の未来に対する予言とも云うべき言葉，

> There must be a necessity superior to our conceptions. It is a very miserable and a very false thing to belong to the majority. We Russians shall find some better form of national freedom than an artifcal conflict of parties — which is wrong because it is a conflict and contemptible because it is artificial. It is left for us Russians to discover a better way. 11

> The great Powers of Europe are bound to disappear—and the cause of their collapse will be very simple. They will exhaust themselves struggling against their proletariat. In Russia it is different. In Russia we have no classes to combat each other, one holding the power of welth, and the other mighty with the strength of numbers. 12

> I believe that the future will be merciful to us all. Revolutionist and reactionary, victim and executioner, betrayer and betrayed, they shall all be pitied together when the light breaks on our black sky at last. Pitied and forgotten; for without that there can be no union and no love. 13

は厳密なる分析的な理論に基づいたものではないが，歴史の流れから感じ取った直感である．しかしそれは理想のみを語っているのではなく，西欧社会には見られなかった新しい体制の社会，その社会が誕生するためには犠牲もやむをえないことであることを知っているのである．換言すれば，空想社会主義者達がたとえテロリストであろうと，彼等の思想が空想的であろうと，情熱の外に社会改革の理論を欠いていようと，その主唱者たるものが運動の犠牲になり，多くの人命が消えても，その後に必ず新しい進歩が始まると断言する Nathalia の感受性は帝制ロシアからソヴィエト同盟へと移行するロシヤ革命を，ロシアに起ころうとしている populism を適確に捕えているのであり，Nathalia の語る言葉の中には人間の愛情と人間社会の力を信ずる信念があり，革命の過程に消えた人々も革命を通じて self の完成を就成出来ると考えるところに人間性への信頼があるのである．

III

小説 *Under Western Eyes* は相拮抗する観念に接した知識人が理性と本能という人間的本質とも云える二つの属性を統一することが出来ず，置かれた環境に作用され，更に自己に対する責任の弱さより苦境に陥ち入る物語りである．

我々はこの作品において正反対の（場合によっては自己破滅の要因ともなりうる）人間，Razumov と Haldin の中に人間の悲劇的要素を Conrad の pessimism 的視点から見るのである．自己確信に満ちあふれ理想を追い，行動性に富み，より大きなものを目指す Haldin は Jim, Gould 又 Lingard と同じタイプの人間であり，我々が驚嘆する程の行為をなすが，同時に，この過ちの世界においては理想を実現しようとする人間は，終局的にはその目的とは逆の善よりも，より多くの悪をこの世界に撒散らす人間として描かれているのである．その理由は彼等の理想を追う理論の根底にあるものは抑圧者によって彼等の内に燃え上がらされた強い衝動が不合理な残忍な理論をその奥に秘めているものであり，彼等がその歪がみを含んだ理論の不合理さに気付かず，自ら感知しえない自己欺満の世界へと直線的に驀進していくからなのである．彼等の終局は Victor Haldin の中に見られる如く，彼等の生きる世界の一犠牲者としてその生涯を終えることになる．一方，このような理想の追求者とは全く逆の，所謂自己の生活にささやかな望みを抱いている知的ではあるが，決断力及び自己に対する責任感の欠ける平凡な Razumov のような人間は危機に接する場合，彼等の夢を，生命を守るべく自己保存の能力を，置かれた環境に対する恐怖のために人生を保持する人間的絆を——広い視野に立ち，社会的状況を正確に分析することなくあやまった感情的前提に基づいた理論により——裏切り，あるいは断ち切ることによって精神的苦悩の状態へと陥ち入るのである．彼等は理性と本能を統一する力を欠いているために，自己分裂の状態の中で再統一の方法を暗中模索するのであるが，彼等の理性と本能の統一は彼等の精神的苦悩を伴うことなく，又より大きな犠牲を払うことなくしては不可能なのである．Razumov の場合，彼の自己保存の本能は，彼の将来の夢にとってそれが必要であったのみならず，Russia の不条理な独裁制度のもとでは，人々は人生を謳歌しているのではなく，人生を忌み嫌い．人生に対する尊敬の念を欠いていることにより，一層強められているのである．Razumov が Haldin の事件に巻き込まれた時，彼にとって大切な問題はこの歪んだ，不合理な，崩壊しようとしている社会の合法的な掟——ideal conception of truth——を無視し，そうした社会に将来の夢をかけずに，真に自己の信ずるところに従って，罪人である Haldin に協力するか？あるいは現存する合法的な掟に従って官憲に協力するか？ である．彼が Haldin 放棄を半意識の内に決定したことは Razumov の中に自己保存の本能が働いたことを証明するのみならず，彼も又 autocratic な人間になることの出来る可能性を秘めていることをも証明しているのである．しかし Razumov が autocracy に関係する人間に対する嫌悪感とその歪みを見出したのは，Peter Ivanovitch を代表とする暴力的革命家達の中においてである．

The ferocity and imbecility of an autocratic rule rejecting all legality and in fact basing

itself upon complete moral anarchism provokes the no less imbecile and atrocious answer of a purely Utopian revolutionism encompassing destruction by the first means to hand, in the strange conviction that a fundamental change of hearts must follow the downfall of any given human institutions. 14

The oppressors and the oppessed are all Russians together; and the world is brought once more face to face with the truth of the saying that the tiger cannot change his stripes nor the leopard his spots. 15

しかし，これもロシア革命は *Nostromo* に見られるような異国人によって支配されている国における革命ではない．従って一般的な革命にはこの理論は無縁であって，Russia の場合にのみあてはまるのである．

Razumov が Haldin を裏切った時，彼は自己の信念に基く個人間の人間的絆よりも，歪んだ社会が認める掟に従ったところに彼の過ちがあったのである．Conrad は一つの支配階級がその存続を目的として造り出した欺瞞的な社会的規範の上に人間的関係が成立するのではなく，個々人の人間の確信に満ちた精神的関係によって造り出される人間的絆の上に人間関係が成立することを強調しているのである．Conrad の語るこの人間関係の絆は Razumov と，Victov Haldin と全く類似した性格の持ち主でありロシアの未来に崇高な夢を持ち，大衆の中に生きる道を見出す純粋な，行動的な Nathalia との関係の中に再現され，死んだ Haldin は Nathalia を媒介として実質的，具体的な存在となって Razumov の前に現われるのである．そして我々は Razumov の Nathalia に対する告白を導き出した力は観念的あるいは抽象的な力ではなく Nathalia のもつ人間性から引き出された力であると気付く時，我々は Conrad の語らんとするところを充分に理解するのである．

Conrad は自己回復という問題を *Lord Jim* においても取扱っているのであるが *Lord Jim* においては理想とする自己の幻影を追い求めることにより自己回復の道を見出す Jim を描き，*Under Western Eyes* では自我を消失した実体のない，全く逆の自我を実に象徴的に描かれた苦悩をとおして最終的に自己回復を計る Razumov を描いているのであるが，その自己回復に至る道は二つの小説では全く逆であるが，Jim にしろ Razumov にしろ自己回復の姿が死であり，不具者になる点において，我々にはやりきれない気持を抱かせるものであり，特に Razumov の場合は，彼を不具者にした人間が Jim の場合のような公的な人を裁きうる立場にいる人間ではなく，スパイなる卑劣漢であることを想い起こす時，我々はより一層暗い救いのない世界を垣間見るのであるが，それがロシアの世界である時，小説 *Under Western Eyes* は単に Razumov の，Haldin の悲劇にとどまらず，ロシアの，ロシア人全体の悲劇に迄拡大されていくものであり，更に愛情も行動も人間に救いを与えるものではなく，より一層深い自己破滅へと導く要因であることを考えるならば，人間が ideal conception of truth と idealess conception of truth を一度誤るならば，その人間を持ちうけるものは実に悲劇的な運命でしかないのである．

BIBLIOGRAPHY

I. PRIARY SOURCES

Conrad, J. *UNDER WESTERN EYES.*
London: J. M. Dent And Sons LTD, 1963.

Fleishman, A. *Conrad's Politics*
Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1967.

Guerard, A. J. *CONRAD the novelist*
Cambridge, Massachusetts: Harvared University Press, 1965.

II. SECONDARY SOURCES

Wiley, P. L. *CONRAD'S MEASURE OF MAN.*
New York: Gordian Press, INC. 1966.

Stewart, J. I. M. *JOSEPH CONRAD*
London: Lowe and Brydone Ltd., 1968.

FOOTNOTES

1) CONRAD, J. *UNDER WESTERN EYES.* P. 10
2) Ibid., P. 33
3) Ibid., P. 34
4) Ibid., P. 36
5) Ibid., P. 34
6) Ibid., P. 37
7) Ibid., P. 175
8) Ibid., P. 66
9) *Conrad's Politics.* P. 228
10) CONRAD, J. *UNDER WESTERN EYES* P. 134
11) Ibid., P. 106
12) Ibid., P. 119
13) Ibid., P. 353
14) Ibid., P. X
15) Ibid., P. X

*) *Conrad's Politics.* P. 225